様式第２号

視察研修先	千葉県松戸市	氏名	太田陽子
視察研修項目	子育て施策について（送迎保育ステーション、駅前・駅ナカへの小規模保育施設の整備）		

感想・所見など

松戸市は首都圏へのアクセスが良く、東京のベットタウン化、急激な保育所の需要に対応するため小規模保育事業の推進を図っており、利便性の高い市内全 23 駅の駅ナカまたは駅前に１１８カ所整備し、需要の多い１歳、２歳児に対応していた。

小規模保育施設の卒園後の進路先として幼稚園が選択肢となるよう、幼稚園の預かり保育を促進するとともに、送迎保育ステーション事業を推進してきた。

幼稚園は市内に３６園あり、子ども園などへの移行はなく、幼稚園としての機能を維持している。共働きでも幼稚園を利用したいという要望や待機児童の問題などに合致し、預かり保育事業の推進に至った。小規模保育事業の利用後、同じように、駅前に送迎ステーション事業所を開設し、そこから幼稚園の送迎バスで登園することにより、幼稚園に通えるようになったということだった。

市内３６園のうち、２４園がこの事業を利用しているということだった。

小規模保育事業所の継続で利用でき、子ども、保護者にとっても安心につながっているということだった。

幼稚園の平日休みの対応なども行っており、働きながら幼稚園に通わせることも、不安なく選択することができているようだった。

核家族が通常の都会で、共働きの世帯にとっては選択肢が増える施策で、利用者数も増加している。令和６年度の問い合わせも多くきているという現状だった。

幼稚園への説明会への参加、出願率も増加しているということだった。

待機児童の解消や駅ナカの小規模保育事業の卒園時の進路先のための補完事業として、整備してきたを送迎保育ステーションだが、朝夕の駅前への送迎だけで済み、保護者のニーズを満たしていることが分かった。

配慮の必要な子どもへの受け入れも行い、児童発達支援センターの併設も考えており、配置基準も松戸市独自の基準で行っている。グレーゾーン等にも市単独の加配をしているということだった。

「子どもに対するお金は、未来への投資である」と意義を話されていた。

駅ナカ小規模保育事業など、園庭がないなど問題はあるとの認識もあるが、保護者のニーズなどあり、拡大してきたが、その中で、卒園後に通う選択肢を増やすなど、保護者も安心して生活できる施策の充実などがとられていた。

寒河江市の保育行政の充実や学校再編整備の問題など、子どもへのお金は未来への投資と考え、何が子どものためになり、地域や保護者、子どもの安心につながるのか考える機会になった。

様式第２号

視察研修エーム敵亜要素先	東京都昭島市	氏名	太田陽子
視察研修項目	アキシマエンシス（昭島市教育福祉総合センター）について		

感想・所見など

　アキシマエンシスは、廃校になった学校と隣接し、新たに図書館を新設した施設で、教育や福祉など複合施設になっていた。
　昭島市は、クジラの化石がほぼそのまま発掘されたことから、市のマンホールのふたなどにもクジラの模様があり、市のいたるところにクジラがあった。
　図書館のエントランスにはクジラの化石がつるされており、来館者を見守っていた。
　新しい施設のため、貸し出しも返却も職員の手を煩わせることなく、ＩＣＴ技術が活用されていた。
　図書館の中には、昭島の歴史が分かる資料館など、プロジェクションマッピングを使った展示などが工夫されていた。ゲーム的な要素もあり、子供も飽きないで見られるような工夫がなされていた。図書館は指定管理者だったが、建設や理念などは市の方針として決めたということだった。
　蔵書数も多く、文庫も多く収められていた。
　個別ブースやグループで使えるスペース、幼児の遊ぶスペース、小学生、中高生が使えるスペースなど、利用者のニーズに合わせて用意されていた。飲食ができるスペースなどもあった。話をしたり、赤ちゃんを連れてきたりできる図書館を目指しているということだった。
　廃校のスペースは、児童発達支援センターや教育相談のスペースや会議室など、新たな役割を備えていた。
　歴史資料館もあり、教育や福祉など総合的な施設があり、住民の使い勝手もよいのではないかと思った。
　図書の貸し出し時、子供には、預金通帳のように借りた本が記入されるなど、興味や意欲をもって、読書を受け入れられる工夫などを行っていた。
　既存の施設の利用ではなく、新しい図書館との融合の中での廃校利用であったが、図書館の利用拡大や子どもへの対応など、学ぶべきことが多かった。
　貸し出しから返却までの工程で、置くだけで借りられるシステムなどの導入は、コロナの中、必須であると思った。
　古い施設でも利用の拡大や蔵書の管理、今後検討することが必要であると再認識できた視察だった。
　市としての考えなどをきちんと持ち、どのように維持していくなど、広く市民の意見を聴くべきと思った。
　子どもの読書好きを作る図書館の役割が、必要だと思った。
図書館の立地条件や交通網など、課題を感じた。

様式第２号

視察研修先	神奈川県大和市	氏名	太田陽子
視察研修項目	「おひとりさま支援条例」と高齢のひとり暮らしの方を支援する取組について		

感想・所見など

大和市は、新横浜や横浜には、電車で２０分くらいのところに位置し、大規模商業施設などもあり、人口は微増している。２０代から３０代が増加している。

難民支援センターがあり、８０の国や地域からの外国人が居住しているなどの特徴があり、寒河江市の５分の１の面積に24万人が生活しているということだった。

平均寿命の延伸により、2040年には65歳以上の高齢者が増大することが予想され、65歳の時点で、90歳まで生存する割合も増大することが予想される。65歳以上の一人暮らしの高齢者も増大すると推計が出ている。また、５０歳時の未婚率が増大する推計もある。現在の大和市の６５歳を含む41,490世帯のうち、一人暮らしの世帯が、16,891世帯で40.7%を占めている現状があり、高齢者の一人暮らしをささえる一つとして、「おひとりさま支援条例」の制定に至った。

高齢者の一人暮らしにばかりという意見は当然あったが、いずれ一人になることを考えれば、重要なことだと理解が広がっているということだった。

一人暮らしは孤立と閉じこもり傾向が生存率にも影響を与えている報告があり、大和市でもアンケートなど調査を行った結果、閉じこもり傾向や社会的孤立が顕著だった。コロナもあり、外出ができないこともあった、

条例の制定により、社会的孤立や引きこもりにならないように、居場所作りやサロンなど実施していた。

終活の相談やエンディングノートの普及など、今後、必要になることの講座など興味深い内容だった。

高齢女性の一人暮らしの問題や男性の引きこもりなど、大きな課題があり、健康に長生きするためにどのような施策があるか、今後も研究が必要であると感じた。

様式第２号

視察研修先	埼玉県富士見市	氏名	太田陽子
視察研修項目	フレイルチェック事業について		

感想・所見など

健康長寿の鍵はフレイル予防ということだった。予防に必要なものは、栄養や社会参加、運動の 3 つ柱で、これを軸にし、包括的フレイルチェックを導入し、フレイルサポーターとして、高齢者の社会参加を促していた。

専門職の市の職員がフレイルトレーナーとなり、サポーターの育成事業を行っていた。市の職員もサポーターの高齢者も生き生きと活動している姿があり、社会に認められ、役に立つことがフレイル予防につながっていることが理解できた。

東京大学への職員の派遣などもあり、職員の意識の向上などにもつながっていることも理解できた。

どの地域でも、高齢者の高齢化による要介護や認知症の増加、高齢者のみの世帯の増加、コミュニティの衰退、コロナによる活動の低下などが課題として上がり、健康寿命の延伸、生きがいづくりなどフレイル予防に向けての取り組みがなされていた。

集まり、健康体操を行っている地域など、寒河江市でも多いが、引きこもっている方への働きかけをどのような形で取り組むのかが今後の課題と考えられた。

いろいろなプログラムを用意し、その中から選べるシステム作りなど課題であり、好きな社会参加ができるようにしていく事が望まれる。興味がある事なら、出てみようとなるのではないかと思われる。

高齢者の生きがいづくりの一環として、フレイルサポーターの育成なども考えられるが、トレーナーの育成が必要であり、職員の増員が望まれる。

視察の中で実際にフレイルチェックを体験したが、ゲーム感覚で行え、楽しんで学ぶことができた。